

湘南の由来とエリアを探る

その7

海を渡って来た「湘南」－1

和田精二

2017,10,15

7-1 高瀬慎吾氏の「湘南由来説」再び！



図1：平塚市中央図書館前にある高瀬慎吾翁顕彰碑

今回は、「湘南」という地域呼称が中国から日本に伝来した理由として考えられる2つ目の仮説である、『「湘南」呼称が伝来し定着する過程に、中国からの渡来僧や日本の禅僧が詩文に詠んだ「湘南」が貢献した。』・・・について考えてみます。

2つの仮説は平塚市の郷土史家 高瀬慎吾氏（1900～1991）が表した湘南の由来説にヒントをもらいました。当時の中国人が特別な思いを馳せた地域である中国の湘南（瀟湘湖南）の地名が記された禅僧の詩文に影響されて、「湘南」が日本に定着していったと推定した訳です。

そこで明確にしたいのが、①「湘南」という言葉が記された詩文の具体的な例があるのか？ ②中国同様、日本においても、禅僧による詩文のブームがあったのか？ ③背景として、当時の日中間に多数の禅僧の往来があったのか？ の3点です。

以上を考えることで、2つ目の仮説のもっともらしさを何とか証明したいと思います。（しつこいですねw）

7-2 「湘南」が詠まれた具体例とは？

最初に、「湘南」という言葉が記された詩文探しの結果をお伝えします。本シリーズの「その2」で「湘南の由来」に関する記述を発見できた文献11冊を紹介しましたが、その後の努力の甲斐もなく、結果的にネット情報を含めて、高瀬氏の記述を超える内容は発見できませんでした。平塚市図書館が保管している氏の著作・共著の図書（14冊）にも、市史編さん室にも新しい手掛かりは見つかりませんでした。

発行年	著者・掲載書名・発行元/ネット情報発信元
1968(S43)	高瀬慎吾他「湘南の文学めぐり」富士出版印刷
1977(S52)	草柳大蔵「湘南の50年」ばら出版
1980(S55)	藤沢文庫刊行会「目で見ると藤沢の歴史」、名著出版
1987(S62)	湯山学「湘南物語Ⅰ」私家版
1987(S62)	みつはし貴義「湘南の逆襲」神奈川新聞社
1992(H04)	サライ「特集・湘南今昔物語」小学館
1996(H08)	吉田克彦「湘南再発見」江ノ電沿線新聞社
1996(H08)	川嶋理夫「新・神奈川県地理」伊倉退蔵監修
1997(H09)	城山町編「城山町史7/通史編/近現代」城山町
2000(H12)	島本千也「湘南別荘物語」私家版
2005(H17)	小風秀雅「湘南の誕生」藤沢市教育委員会
2006(H18)	本田一壽「湘南雑記」新風舎
2009(H21)	小風秀雅「茅ヶ崎市史ブックレット11」茅ヶ崎市
2013(H25)	日本地名の会「神奈川県民も知らない地名の謎」PHP文庫
2016(H28)	深野彰編著「うしろうにみる小田原」新評論
2017,09,06	ネット情報：Wikipedia、Jタウンネット、ASAHI ネットBLOG サービス、湘南プロムナード、by ofuna-law、美術目次、

表1：湘南の由来についての記述が見いだされた文献

そうすることで、湘南という言葉が記された詩文探しに一区切りつけ、「湘南」という単語が発見できた具体的な例について、以下の表2にまとめてみました。

時代	文献・資料に現れた「湘南」の事例
平安	●勤子内親王の命で源順が編纂した辞書「倭名類聚抄」に中国長沙国「湘南」県の記述がある。
鎌倉	●1339年、夢窓疎石（国師）が西芳寺の作庭時に

室町	<p>池畔の建物に湘南亭と命名した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 円覚寺の夢窓疎石の周囲に湘南を冠する人物（湘南涼）や建物が散見される。 ● 1543 鎌倉明月院で無隠法常老師が「湘南葛藤録」を印施した。 ● 1664 大磯の俳諧道場・鳴立庵の初代庵主崇雪が湘南の文字を刻んだ石碑を鳴立庵に建立した。
江戸	<ul style="list-style-type: none"> ● 禅僧/鉄牛が海老名の瑞雲山竜峯寺で詠んだ詩で相模川を湘川、湘浦と表した。【高瀬】 ● 明からの渡来僧/木庵が小田原・入生田の長興山紹太寺で詠んだ詩で相模湾を湘江と表した。【高瀬】 ● 相模国の詩文に、湘東、湘水、湘岳、湘峡、湘川、湘浦が登場した。【高瀬】
明治 (参考)	<ul style="list-style-type: none"> ● 1880 自由民権結社湘南社設立、1889 湘南村誕生、1893 新聞見出し「湘南の腥風」、1895 新聞記事「湘南の夏」、1898 徳富蘆花「湘南歳余」、1899 新聞記事「湘南だより」、1900 徳富蘆花「湘南雑筆」(ベストセラー)、1902 新聞記事「湘南太平の夢」、1903 広告「湘南海岸」、1904 湘南馬車鉄道会社設立、1905 新聞記事「湘南の避暑客」、1906 新聞記事「湘南避暑大繁盛」、1907 観光ガイドブック「湘南の夏」、1909 湘南遊覧臨時列車、1909 鉄道院線沿線遊覧地案内「湘南」、1910 海水浴は湘南海岸が確立、他 ● 漢詩人 大久保湘南(1865-1908)。相模原の日本画家 片野湘雲(1875-1939)。

表2 文献・資料に現れた「**湘南**」と「**湘**」

鎌倉時代以降に出てくる最初の事例は、禅僧・夢窓疎石が京都・西芳寺(苔寺)を作庭した際に、池畔の茶室に名づけた「**湘南亭**」です。暦応2(1339)年、疎石が中国の仏教書「碧巖録(へきがんろく)」第18話にヒントを得て「**湘南亭**」と命名しています。

7-3 元祖「**湘南**」の名付け親 夢窓疎石

疎石が**湘南亭**と命名した暦応2年は、後醍醐天皇が吉野において崩御した年です。後醍醐天皇と言えば、建武の新政を行ったものの3年弱で崩壊、その隙について足利尊氏が光明天皇を

立てて征夷大將軍となり、室町幕府を開ききっかけをつくった天皇です。後醍醐天皇は吉野に逃れて皇統の正統を主張したため南北朝時代が始まりました。政治手腕に長けた疎石にとって、彼に国師号を授けた後醍醐天皇も、敵方の足利尊氏も師に当たることから、両者の対立や、まともや起こった戦乱に苦しむ衆生に心を痛めたことは想像に難くないところです。

疎石が、南朝や北朝といった政治的対立の無用さを訴え、敵味方なく同じ船に乗り合わせる寛容さで人間の我執を越えた平和な世界を表現しようとしたことは、「碧巖録(へきがんろく)」に出て来る「**湘**之南」「**潭**之北」「**黄金**」「**合同船**」「**瑠璃殿**」が、西芳寺の「**湘南亭**」「**潭北亭**」「**黄金池**」「**合同船**」「**瑠璃殿**」にネーミングとして反映されていることから明らかと思えます。(注1)

疎石が「碧巖録」第18話にヒントを得て「**湘南亭**」と命名した時、「**湘南**」という呼称が日本の表舞台にはじめて登場した!と言ってよさそうです。ということは、今から約680年前に、日本で初めて「**湘南**」呼称を定着させた夢窓疎石こそ、日本における「**湘南**」の名付け親の元祖と言えるのではないのでしょうか。



図2: 元祖「**湘南**」の名付け親 夢窓疎石

夢窓疎石については本シリーズのその1でも書きましたが、上記の様に、**湘南**遺産の由来を語る上で極めて重要な人物ですので、もう少し触れておこうと思います。

疎石は、北条高時や足利尊氏などの武家だけでなく、後醍醐天皇や光明上皇などから尊敬と信頼を受け、夢窓・正覚など7つの国師号を贈られたことから「7朝帝師」と仰がれ、我が国屈指の禅僧とされています。仏教以外の領域として彼の政治手腕に才能を感じる向きもありますが、感性面でも天賦の才能に恵まれていたようです。

彼は、書、漢詩、和歌など、どれをとっても天才の域に達していたと言われます。当時は、天皇の名の下に選ばれる勅撰和歌集にどれだけ選ばれたかによって歌人の力が計られましたが、和歌四天王と呼ばれた吉田兼好（徒然草の著者）の18首に対し、夢窓は堂々11首といえますから、彼の多才ぶりが分かります。

彼の才能の広さは留まるところを知らず、鎌倉の瑞泉寺や京都の西芳寺、天龍寺など数多くの寺院の作庭も行っています。特にその晩年にデザインした西芳寺庭園の空間構成は、室町三代將軍義満の北山殿（金閣寺）や八代義政の東山殿（銀閣寺）の庭園の規範モデルとなっているほどです。

もっと身近なところでは、今日の和風住宅に連綿とつながる書院造やその庭園の成立にも大きな影響を及ぼしている他、「枯山水」様式の確立に極めて重要な役割を果たしています。

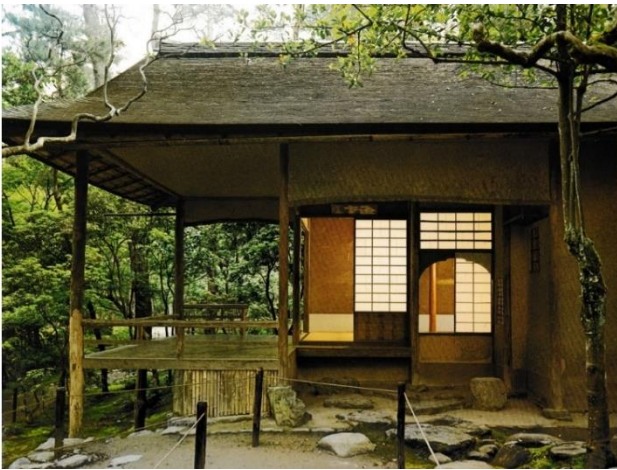


図3：京都西芳寺の「湘南亭」は夢窓疎石によって命名された

注目したいのは、疎石が作庭時に山水河原者といわれた被差別人を使っていることです。ただし、被差別人を活用したのは疎石が初めてではなく、時宗や禅宗も彼らに接近して活動していたようです。（注2）この事実は、時宗開祖である一遍上人や時宗総本山・遊行寺等を経て、湘南遺産に繋がっていくことから、再度論じてみたいと思います。

さて、疎石の前半生は人里を離れた山野での修行の日々でした。はじめは諸国に師を訪ねて旅していましたが、やがて

自己の修業に相応しい人里離れた自然の景勝の中に庵を結び、そこに籠ったと言います。ところが、彼の名声が上がるとつれ禅僧の間で夢窓疎石ブームが発生、彼を慕う追っかけ禅僧が深山の庵にまで押しかける事態が発生、そのたびに下山しては次なる幽棲の場を探して諸国を巡ったといえます。

こうして禅僧の間に疎石を慕う大ブームが起これば、当然、湘南亭をきっかけに禅僧の心の故郷・瀟湘湖南の地「湘南」に思いを馳せるあまり、湘南を名乗る人物が現れたり、建物に湘南を冠する例が出て不思議ではありません。実際に、円覚寺に疎石が滞在していたころ、彼の周囲に湘南を冠する人物（例えば湘南涼）や建物が出現したようです。

7-4 江戸時代にできた「湘南」の下地

こうした禅林社会における湘南ブームが去った後、次なる湘南ブームが発生するのは明治時代の東京から神奈川にかけてのエリアです。この時の湘南は、中国の湘南のイメージを引きずった借り物ではなく、相模湾に面した海浜地帯、それも避暑地「湘南」という近代的なイメージに彩られていました。そのような進化を遂げた地域呼称が独り歩きするには、その前段階として、「湘南」という言葉が地域に定着する期間が必要であり、その時代こそ、「相模国に、湘東、湘水、湘岳、湘峡、湘川、湘浦が登場した」と高瀬氏が指摘する江戸時代であり、背景には、江戸時代における黄檗宗を中心とした禅宗文化の寄与がありました。それは、冒頭にあげた『湘南呼称が伝来し定着する過程に、中国からの渡来僧や日本の禅僧が詩文に詠んだ「湘南」が貢献した』プロセスの存在です。そして、以上を指摘したのが高瀬慎吾氏なのです。

という訳で、肝心かなめの江戸時代ですが、表2から明らかのように、高瀬慎吾氏が江戸時代の具体的な詩文の例をあげていないため、誰がどこでどのように広めたのかわかりませんが、湘南の「湘」を冠した「湘東」「湘水」「湘岳」「湘峡」等が使用されたことで、「湘南」イメージが文人を中心に浸透・拡大していったと考えることが出来ます。

ここで今回のテーマである「湘南という言葉が記された詩文の具体的な例は？」に対する解答ですが、高瀬氏の原文の中で披露することで目的を達したいと思います。

7-5 2編の境内八景詩に湘南定着の兆し！



図4：湘南の由来を最初に記述した郷土史家・高瀬慎吾氏

『「サガミ」という呼称に、なにびとかが、相（ショウ・サウ）、模（ポ・モ）の字をあてたので、やがてこれが「相州」となり、「相陽」となり、あるいは「相中紀行」などと、広くもちいられるようになり、ついでに「湘陽」「湘南」と飛躍して来たのである。「相」を「湘」と書きはじめたのは、鎌倉時代にさかのぼり得るかも知れないが、はっきり指摘することが出来ない。いまわたくしは、わたくしの管見による（それも江戸時代の）1, 2のことを、以下に乗せてみたい。

黄檗宗（おうばくしゅう）が日本に渡って来たのは承応3年（1654）で、隠元隆琦（いんげん・りゅうき/1592-1673/黄檗宗の開祖）はじめ2名が来朝した。この僧たちはすべて中国に生まれ、育ち、かつ修行大成した禅僧たちです。木庵（隠元に招かれて来日）が箱根と小田原の中程、北側に位置する入生田の長興山紹太寺に来たときにつくったという「境内八景」の詩がある。そのひとつに「湘江雪浪」というのがある。

湘江雪浪

風雷夜吼動窓扉 暁看潮声撃海磯
十里長浜崩六出 簸空白白卷還飛

この詩で木庵は相模湾一帯の海浜を指して「湘江」とよび、10里の長浜に舞う白雪の姿に感銘している。中国の地図を開いてみると、揚子江の源流をなす地域に、相模国の何倍もある洞庭湖がある。この洞庭湖を北にもつ平原を「湖南」と呼ぶのである。ここで広西省の陽海山に発して北流する「湘水（湘川）」が、瀟水に合して悠々と洞庭湖にそそぐのである。その河水は澄んでいて、よく十尋の底を見ることができると言われ、沿岸

の風景は変化に富み、絶景八処が撰らまれ、古来これを瀟湘八景と言っている。また、登山の妙境、衡山のあたりを「湘南」と呼んでいる。碧巖録という中国の禅書の第18則によると、耽源という僧が唐の皇帝肅宗の問いに対して、無造作に「湘乃南、瓢之北」と、含蓄ある言葉をもって応答している。湘南・譚北は言うまでもなく、湘水に沿った都邑（都会のこと）・湘譚（しょうたん）のあたりにちなむ勝境の雅語である。

相模国の「相」を「湘」に、さらに「湘南」と美化粧したものは、大陸の名勝「瀟湘」や「湘南」による詩文などから、かの地に憧憬をもった学僧たち、ないしは鎌倉時代からあいついで来朝した渡来僧などに始まったのではあるまいか。



図5 木庵が境内八景詩を詠んだ紹太寺（入生田）

鉄牛道機（1629-1700）は、俗姓藤原氏、はじめは京都の妙心寺で、臨済の学風を修したが、のち、隠元隆琦に参じて黄檗宗に入り、木庵性瑠の印可を得たと伝えている。「長興山紹太寺」は、小田原藩主稲葉侯の請に依じて、鉄牛が開祖した寺である。この鉄牛が、相州高座郡国分村（現在の海老名市国分）の「瑞雲山竜峯寺」でつくった「境内八景」詩のひとつに次の一絶がある。

湘浦度船

溶溶滄口水拍天 行人幾度涉湘川
早知世路風波峻 来往可愛灩澦船

鉄牛は、相模川を「湘川」といい、また「湘浦」といい、相模川の渡船を灩澦（中国四川省の河）の峻に比している。このほか、相模の詩文によると、「湘東」「湘水」「湘岳」「湘峽」等の文字に出会う。「湘岳・湘峽」は相模国の霊山大山をいい、「湘水」は「湘水ノ浜」と書いて相州の海辺をいい、「湘東」は鎌倉

湘之南譚之北 中有黄金充一國
無影樹下合同船 瑠璃殿上無知識

(湘の南 譚の北 中に黄金有って一國に充つ
無影樹下の合同船 瑠璃殿上に知識無し)

注2：夢窓疎石が非差別人を使って作庭した背景

非人、河原者、と呼ばれた最下層に対して救済の手をのべたのは禅宗だけでなく、一遍が率いた時宗の方が積極的だったようです。一遍上人を描いた「一遍聖絵」や「遊行上人縁起絵」には、一遍の周囲に乞食、障がい者、病人、非人、さらに遊女に至るまで、多くの被差別人が描かれています。時宗は、鎌倉時代後期にあって、積極的に被差別の芸能者とのかわりを持ちましたが、次第に内部から崩壊の要因を生み、一遍時代の生き生きした精神を失っていきました。そうした時宗に替わったのが禅宗で、被差別民を含む文芸、芸能、造庭等にたずさわる者たちの理論と精神面をカバーした面は大きいと言われています。こうした時代、時宗から禅宗へという転換点に生きたのが夢窓疎石でしたから、彼が作庭に河原者を使ったのには必然性があったのです。

■図表出典：

図2：<http://www.kamakura-zuisenji.or.jp/muso/> 2017

図3：「原色日本の美術 15」小学館 1967

図4：「平塚ゆかりの先人たち」平塚人物研究会 2013

図5：https://tesshow.jp/kanagawa/odawara/temple_iryuda_shodai.html 2017

図7：Wikipedia 龍峯寺

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%BE%8D%E5%B3%B0%E5%AF%BA#/media/File:Ryuhoji_Ebina.jpg 2017

■出典資料

・禅からみた日本中世の文化と社会 天野文雄監修
ぺりかん社 2016

－日本中世禅林における杜詩受容 太田亨

－禅林墨蹟の二面性 野口善敬

・湘南の文学めぐり 高瀬慎吾他 富士出版印刷 1968

・夢窓疎石 熊倉功夫・竹貴元勝編 春秋社 2012



図6 鉄牛が境内八景詩を詠んだ龍峯寺（海老名）

およびその附近の地をいっている。』 高瀬慎吾「湘南の文学めぐり－湘南について－」（湘南紀行文学会編）1968

念のために、「湘南」という言葉が記された詩文の具体的な例についてまとめた表3を以下に添付しておきます。

訪問した寺	寺を訪問した禅僧	国籍	湘南を詠んだ詩文
長興山紹太寺 (小田原市・入生田)	木庵性瑠	渡来僧	「境内八景詩・湘江雪浪」 相模湾を湘江にたとえる
瑞雲山龍峯寺 (海老名市国分)	鉄牛道機	日本人	「境内八景詩」 相模川を湘川・湘浦にたとえる

表3 禅僧が詩文に詠んだ「湘南」の具体的な例

因みに、箱根・入生田にある紹太寺は、寛文9(1669)年、第2代小田原藩主稲葉正則が、父母と祖母の春日局を弔うために創建した寺ですが、開山は黄檗宗の名僧鉄牛和尚で、広大な寺域に七堂伽藍が配置され、黄檗宗では関東一の大寺院だったといえます。一方の龍峯寺は、室町時代初期に創建された臨済宗建長寺派の寺院で、鎌倉時代初期に作られた国指定重要文化財の木造先手観音像を有しています。 ◆

■補注

注1：疎石は「碧巖録」第18話にある唐の8代皇帝代宗(だいそう)と南陽忠国師との問答ならびに大恵文庫における亮座主の故事をもとに作庭したと伝えられますが、湘南亭の命名については前者の下記の詩文によります。